

主観的現実をつくるメディアトーク

——ワイドショーのトークタイプと発言機能——

石山玲子・川上善郎

1. はじめに

1-1 主観的現実に影響を与えるワイドショー

高度情報化社会といわれる現代において、我々はメディアが提示する世界を情報として取り込み、その情報を基に主観的現実（我々が現実であると認知している頭の中の世界）を構成する。とりわけ未知の事柄については、メディアが提示する世界、つまり、メディア的現実をまずはそのまま物理的現実として理解する場合が多い。我々が、主観的現実を構成する過程において、メディアによる情報収集の手段としてインターネット、新聞、雑誌などさまざま挙げることができるが、テレビは一つの有力な手段といえる。ニュース番組やワイドショーなどは、我々の主観的現実を構成する上で多くの情報を提供している。たとえば、我々はある事件や事故などが生じたことを、ニュース番組を視聴することによって知り、さらなる情報を得ようとしてワイドショーを視聴することもある。もちろん、ワイドショーは平日の昼間放映されているという状況を考えると、視聴可能な層はある程度限定されはする。しかし、週5回という放映のうち3-4回はワイドショーを見るという女性が半数を超えるという調査結果（川上、2002）を見る限りでは、主観的現実構成においてワイドショーによる影響というものを軽視することは決してできない。

では、ワイドショーによる情報取得は、実際どのような場合に行われているのだろうか。ワイドショーの利用のされ方をみると、「周囲の人との話題を得たいとき」や「キャスターや出演者の意見を知りたいとき」、「事件などの詳しい背景を知りたいとき」には、人々は情報源としてニュース視聴よりワイドショー視聴を選択する傾向がみられる。たとえば先の調査では、いずれの場合に

おいても、半数を超える女性が事件報道をニュース番組かワイドショーのどちらかしか見られないとしたらワイドショーを選択する、としている。このような結果から川上（2004）は、ワイドショーと視聴者の関係について以下の3点を指摘している。つまり、(1)ワイドショーは人々の間に話題を提供し、(2)キャスターやコメンテーターの意見を伝えることにより、視聴者がこの話題をどう捉えるかだけでなく、世間の人々がどのように受容しているかを示唆し、また、(3)事件などの詳細について推測を交えて伝えることにより、視聴者がワイドショーに積極的に参加する可能性がある、という点である。

1-2 本論文の研究目的

上記3点の指摘を踏まえ、本論文では、(2)のキャスターやコメンテーターによる発言の重要性に焦点を当て、かれらがワイドショーのスタジオの中でどのようなトークを展開しているかを分析する。ワイドショーの構成を見ると、まず、ビデオ映像による内容紹介があり、その後、スタジオで出演者によるトークが行なわれる。このトークによるフォローが、同じテーマを扱っていてもワイドショーをニュース番組と区別させる特徴の一つであるといえる（石山、川上、大石、鈴木、松田、2005）。ワイドショーの視聴者はワイドショーで取り上げられたあるテーマに関し、ワイドショーのキャスターやコメンテーターの意見を視聴することによって、他の人がどのような意見を持っているのを知り、その上で自分の意見を構築する。または、はじめから持っていた自分の意見と出演者の意見を照らしながら自らの意見を再構築したり強化したりする。ワイドショーで展開されるトーク場面を見ると、スタジオではさまざまな発言が飛び交う。キャスターやコメンテーターによるスタジオでのトークは出演者間の相互作用の中で進展しながら、一つの、またはいくつかの方向性を視聴者に示す結果となる。つまり我々は、ビデオ映像からの情報に加え、そのようなトーク場面から得た情報から主観的現実を(再)構成し、そこで示された意見を受容したり、あるいは、拒否したり、場合によっては啓発を受けたり、感動を受けたりしながら自らの意見を構築していくのだ。

このような意味で我々の意見形成や現実の見方にも重要な影響を及ぼすと考えられるトークだが、そこにはいくつかのパターンを見出すことができるのではないか。もしそうであるのなら、それぞれのトークタイプにおいて行なわれ

る発言やトーク全体には形態上どのような特徴があるのだろうか。さらに、それぞれのトークタイプにおける各々の発言は出演者間の相互作用の中でどのように展開し、どのような機能を果たしているのだろうか。そして、その発言の機能にはトークタイプごとに特徴が見られるものなのか。

本論文では、スタジオトークの基本的なパターンを選び出し、形態の分析のみならず出演者間の相互作用に着目した会話分析を行なうことによって、トークの特徴を明らかにする。これにより、ワイドショーにおけるスタジオ場面のトークが人々に対しどのように影響を与えているのかを考察する上での重要な示唆をえることができるだろう。

1-3 ワイドショーのトークタイプ

スタジオトークでのパターンをみると、ワイドショーの中でしばしば交わされるトークのタイプとして「雑談トーク」がある。番組で取り上げられたトピックやテーマには直接関係のない話が交わされ、そこからトークに花が咲くときがある。たとえば、急に、「今日は特にきれいですね」などと、他の出演者に話しかける。トーク内容は、まさに、何気ない日常の会話においてみられる雑談に近いものだ。このような雑談トークは、重要度の高いものとはいいがたいが、出演者間の親密性を高めリラックスした状況を作り出し、同時に、ワイドショーらしい雰囲気を醸しだしているようにもみえる。

さらに、視聴者に対し珍しい情報を提供していく場合にある一つのパターンが見られる。トークの中で、司会者が、次々とテーマについて驚くような新情報を得意げに提供していく場面などだ。たとえば、宝石ショーの紹介をしているときに、「こんなこと知らないでしょう」といった後、「これは実は1点3,000万円する高価なものだ」とか「世界に2点しかない貴重なものだ」とかいった具合である。他の出演者のみならず視聴者も、その新奇性に思わず驚きの声を上げる。このように、興味をひきつけ情報を提示する発言の形態を、「トリビアトーク」とよぶ。新情報提示のたびに、スタジオ全体がどよめき高揚する様子が覗える。

事件・事故のニュースはワイドショーでは欠かせないものとなっている。事件・事故が発生し、概要を追ったビデオ映像が放映された後、スタジオでは、トークの中でその原因が詮索される。たとえば、一家心中事件の発生では、出

演者による「この点はどうなの」、「それはこういうこと？」などという疑問が解説役のレポーター兼司会者に次々とぶつけられ、原因究明が試みられる。これを「詮索トーク」と名づける。「なぜ」をテーマにトークは進展する。客観的な確証のある結論がでるものではないのだが、トークによって事件そのものへの理解が深められ、ときには、共通の推測が構築されていく。客観的な確証ぬきに一定の結論が示されるところに、ニュース番組ともっとも異なる特徴がある。

さらに、解説調を基調としたスタジオトークもみられる。いわば、「解説トーク」とよべるものである。解説トークでは、コメンテーターがそれぞれの立場から、「～という可能性もあります」、「～という解決のしかたが考えられるでしょう」というように、解説という形態をとりながら、ある視点からの解釈を付加するというタイプである。たとえば、BSE 問題では、出演者はそれぞれの立場に応じて、さまざまな角度から問題点や解決方法を冷静な態度で理路整然と提示する。このようなとき、場の雰囲気も一定の方向に向かい、視聴者に対し強い説得力を与える。ニュース番組に近いトークではあるが、ワイドショーにおいては、必ずしも「専門家」が解説するわけではない点に特徴がある。

対照的に、出演者の激情が噴出し、個人に対する批判が続出するトークもある。これを「悪口トーク」とよぶ。たとえば、幼児虐待のニュースのときなど、「そんなひどいことをするなんて信じられない」、「母親失格ということですよね」などといった調子だ。行動に対する批判ばかりでなく、個人の人間性や母親としての資質を厳しく批判し、さらに、他の出演者へ意見の同調を求めていく。この場合、出演者は視聴者の代わりに感情を表出するという役目を担っているように見える。このような形態は、視聴者の気持ちをストレートに代弁するがゆえに、ワイドショー視聴理由の大きなポイントの一つとなっているかもしれない。

これら「雑談トーク」「トリビアトーク」「詮索トーク」「解説トーク」「悪口トーク」という5つのトークタイプを取り上げ以下では会話分析に基づいた事例研究を行なう。

2. 研究方法と分析手順

2-1 会話分析

会話分析は、ハーヴィー・サックスによって用いられた方法で、エスノメソドロジーでは基本的な方法といわれる (Sacks, 1992、山崎、2005)。分析においては、人々の行なっている具体的な事柄 (現象) を取り上げ、行為を相互反映と文脈依存という視点から記述するという方法がとられる。会話はそれ自体が現象といえるものであり、ゆえに社会的行為を追及する上で、会話を対象とした研究というものには十分意義がある (岡田、2004)。一方、メディア分析を行なう上で、従来、内容分析という手法がとられており、そこでは取り上げられているテーマを明確にして提示したり、また、全体の時間配分や人々の性別や職業などとの関連を明らかにするなどの研究が行なわれている。しかし、スタジオで何が話されているかを人々の社会的相互作用の中から明らかにしようとするならば、会話分析という手法は有用であるといえよう (山田、2004)。

これまでの会話分析研究において、テレビ番組を取り上げたものはいくつか見られる。たとえば、スポーツの実況放送 (三宅、2004)、震災報道のニュース (檜村、1999)、テレビ討論 (本田、2004)、NHK 番組『クローズアップ現代』 (高橋、2004) では、各番組におけるアナウンサーや解説者や司会者などを対象とした分析を行なっている。さらに、ニュース番組におけるキャスターの会話 (ニュース内容以外の語りの部分) に焦点を当てて分析を行なったもの (村松、2005、藤田、2006) もある。ニュース番組におけるキャスターの語りに焦点を当てた藤田 (2006) は、言語的、非言語的、さらに映像化という3つのモードを用いて会話分析を行なうことにより、キャスターの「語る」という行為がどのように成立するかを見出した。また、テレビ討論での司会者を対象に分析を行なった本田 (2004) は、進行管理役である司会者の役割に触れ、中立的立場を維持する様子を明らかにした。さらに、ニュースインタビューでは、日常会話には頻出する応答的行為、つまりこの場合は、インタビュアーがインタビュイーの発言に対し耳を傾けているという確認のマークや驚きや同意を示すというような何らかの反応であるが、それらが封じ込められている点が明らかにされた (Clayman & Heritage, 2002)。以上、テレビ番組を取り上げた会話分析はさまざまあるが、これまでワイドショーについて取り上げた研究

は見当たらない。

2-2 分析手順

実際の分析は以下の手順で行なった。まず、ビデオ録画したワイドショーの各番組について、番組全体の構成表を作成し、スタジオでトークが行われる「トピック提示」、「テーマ提示」、「ニュース形式トークあり」におけるトーク場面のトーク内容に着目した¹⁾。次に、前述の5つのトークタイプについて代表例と思われる項目を取り上げ、会話分析を行なった。

会話分析に先立ち、ビデオ録画したデータをデジタルデータに変換した。この変換したデータをコンピュータに取り込むことにより、データの劣化を防げるうえ、コンピュータ上での分析が可能になる。実際に会話のSCRIPT作成に当たっては、5秒程度の部位に区切り、繰り返し再生、スロー再生、静止などを行い、項目ごとにSCRIPTを作成した。まず、一つ一つの発言に関し内容を文字起こしし、次に、強調部分や声の高低、伸ばし具合、間などを詳細に分析し記入を付け加え、さらに、身体の動きや視線に焦点を当て分析を加えた。続いて、それぞれの発言と発言の重複する部分を捉え、その場での相互の発言の状況が正確に再現できるよう分析を追加していった。尚、分析にあたり使用したSCRIPT記号は資料1に示す(田中、2004)。最後に、こうしてできたSCRIPTに従い、トーク内容を分析した。

3. 分析

スタジオトークの発言内容からみた5つのトークタイプを、(1)雑談トーク、(2)トリビアトーク、(3)詮索トーク、(4)解説トーク、(5)悪口トークの順に提示し分析する。事例ごとの司会者と出演者は資料2に示す。

3-1 ニュース内容の本筋と関係のない「雑談トーク」

雑談トークとしてとりあげたのは、事例1「トリノ冬季五輪公式ウェア発表」についてのトーク場面で現れたものである。「とくダネタイムス」全体の中では、最後の9項目にあたる。出演者は、小倉智昭、春日由美、笠井信輔、前田忠明、高木美保、デーブ・スペクターの6人である(資料2参照)。弓型

表-1 雑談トークの SCRIPT

01	笠井	「戦場のメリークリスマス」は、私の結婚式の()入場の曲であり [ました ((微笑しながら))
02	小倉	[hungah (噴出す)] [なん↑で、]
03		((笑いながら))
04	全員	[ahahaha]
05	高木	なに() [戦場に: (0.1) なる↑の?
06	春日	[えっ()なぜ? ((ゆっくり)).
07	笠井	いや大好きな曲で [(0.1) ぱっちり合いましたよ、坂本教授の曲が ((両手を広げながら)) =
08	高木	[わたしも:]
09	笠井	=しかし、確かに <u>戦場</u> にはなるんです ((微笑)) [(.) ええ: ((下唇を軽くかんだり首を振ったりする))
10	高木	[ahaha]
11	春日	[>結婚生活が<↑ぬ、]
12	笠井	は:いい、以上タイムスでした、余計なひとことを ((微笑)).

カウンターテーブルの左端に笠井が解説役兼トーク進行役として登場する。少し空いて春日、小倉が中央に並び右隣には、高木、デーブ、前田が続く。まず、約1分程度のビデオ映像が放映され、笠井がナレーションをしながら内容を紹介する。次に、笠井がコメントをするところからスタジオ場面が始まる。トーク場面は約20秒という構成で、合計でも1分半に満たない程度の短時間のものである。

ニュース内容をみると、まず、渋谷で開催されたトリノ冬季五輪の公式ウェア発表会の様子を紹介している。会場では、今回モデルをしている冬季五輪選手候補者二人が、新ウェアを着て笑顔で写真撮影に応じている。次に、モデルのうちの一人であるフィギュアスケートの安藤美姫選手に焦点を当て、12月に予定されているトリノ冬季五輪代表選手選考会での新プログラム (使用曲: 坂本龍一作曲「戦場のメリークリスマス」) を、彼女がスケートリンクで軽やかに滑る姿をビデオで紹介している。

次のスタジオ場面では、笠井を中心にゲストを交えたスタジオトークが展開される。ここではもっぱら笠井の結婚式の入場曲が「戦場のメリークリスマス」だという話に終始する。表-1にトークのSCRIPTを提示する。

ビデオ映像の放映が終わり、スタジオに画面が切り替わると、まず、笠井は01で、ニュース映像で紹介された安藤美姫選手の新プログラムの曲目が自分の結婚式で使用した曲と同じであるとコメントする。ニュースの中心は、公式ウェア発表会と安藤選手についてであったが、これらについてのコメントはなく、笠井の発言は本筋とは関係のない自分自身の結婚式の曲目についての言及となる。ここでは、本筋とは関係のない新たな話題提示 (論点創出機能) が行

われている。

笠井の発言が終了する前に、小倉が02で吹き出し、笑いながらその理由を尋ねている。小倉は、なぜ荒れた戦場という場所を舞台にした曲を、笠井が晴れやかな結婚式の入場の曲として選んだかわからずにとっさに吹き出したと思われる。つまり、背景には、「戦場」という言葉のイメージと「結婚式の入場の曲」というイメージは結びつかないもの、アンバランスなものという価値観があるからだろう。さらに、02小倉の発言と04他の人たちの笑いが起きるタイミングは重複しており、全員が何らかの反応をほとんど同時に行っている様子が窺える。この笑いは視聴者にとっても共有できるもので、いわば、視聴者の代わりに笑うという代理感情表出が行なわれているともいえよう。笑いに続けて、まず、05で高木が、そして、高木の発言とかぶるように06で春日が、「戦場」イコール「結婚式の入場の曲」という図式にどうしてなるのかという発言をし、そこにズレを認識している。つまり、このような価値観は、小倉だけでなく、他の人にも共有されている。高木は、「戦場に：(0.1)」と「戦場」という言葉の後を伸ばし、また、春日は「なぜ」という言葉をゆっくり発言し、笠井に対し説明要請をする一方、発言を行なっている間に、このアンバランスに対し何とか自分なりに結びつけられるような回答を探しているかに見える。両者とも、あまり熟考することなく、まず反応を口に出しており、気楽に発言が行なわれている。

そこで、07の笠井が「大好きな曲だから」という理由を挙げ、その回答に反応するように08で高木が笠井の発言が終る前に「わたしも：」と同調する。ここでは、高木による同調提示機能が作動している。笠井は02、05、06で出された小倉、高木、春日の疑問に対し回答を示すことにより論点に整合性を与える。08の高木の同調がその裏づけとなる。いわば、疑問を解こうとするかに見える07の笠井の発言は、論点解決機能を果しているといえるだろう。

しかし笠井の言いたかったことはその後であり、09の発言となる。ここでは、論点を追加するような形で、笠井の真意が、ユーモアの形を採って発言されている。つまり、論点追加機能が行なわれているといえよう。「しかし」から始まる09の笠井の発言は、結婚生活に関し「戦場」という言葉を強調しているのだが、このあたりからにこやかな微笑を伴い、いたずらっぽく下唇を軽くかんだり首を振ったりという動きが見られる。このような微笑や身体動作から

も、笠井の発言が人々の認識のズレを利用したユーモア発言であると推測できる。この場合、ユーモアとして本音を表出させることにより、表立って角を立てることもなく、かつ、主張をすることにより、自分自身を精神的に解放するというような役目を果たしているといえよう。

この「戦場になる」という09の笠井のユーモア発言に対応し、即座に10で高木は大笑いで受諾し同調を提示し話を展開する方向へ導いている。

と同時に11の春日は笠井の発言の意味を補足する。この高木の笑いは、09の笠井の発言をユーモアと認知し決定している。ここにも、価値観の共有が見られる。さらに、11の春日の発言は、笠井の発言で不足している「結婚生活」というポイントを補足し、出演者共通の理解を助け、促進させるための解釈補助機能を果している。

最後に12の笠井の発言では、「は：：い、以上タイムスでした」とトーク終了の合図を少し早口で言い、続けて「余計なひとことを」と小さな声で言って、不まじめモードからまじめモードへの転換を図っている。

以上みてきたように、この事例におけるスタジオトークは、笠井の発言内容ははじめその他の人々によるトーク全般にわたり、本筋とはあまり関係がなく、かつ、意味のない雑談トークといえるものとなっている。

3-2 新しい知見が披露される「トリビアトーク」

トリビアトークとして取り上げたのは、事例2の「川でチョウザメがつかれた、キャビアを産むのか」で現れたものである。この項目は「とくダネタイムス」として番組全体の中程の4番目にあたる。まず、約3分程度のビデオ映像が放映され、笠井がナレーションをして内容を紹介する。次に、笠井がコメントをするところからスタジオ場面が始まる。トーク場面は約2分という構成であった。

ビデオ映像の内容は、熊本県山鹿市菊池川でウナギ釣りに来ていた中学生がチョウザメを釣ったことを取り上げている。このチョウザメは体長90センチあまりだが、キャビアを産むのではないかと家族から期待されたものの、成魚になるまでまだ6、7年くらいかかるし、オスカメスかもわからないのであまり期待はできない。結局、家では飼えるような水槽がないので近所の知り合いに引き取ってもらったという。ここで話題になったのは、どうしてロシア産のチ

表-2 トリビアトークのスク립ト

01	笠井	は：そうですか、ということですね>ちょっとこれ<チョウザメの生態なんですけれども、実はこれを
02		専門家の方に見(げ)てるどころ、ずいぶん()やせてるベステルだなと、チョウザメ()科なん
03		ですけれども、((スクリーン上を指示棒で指す))チョウザメ科といっても実はサメでないって知って
04		ました？
05	高木	['はい' ((うなずく))
06	春日	['はじめて、え()そう[なんですか？
07	笠井	「チョウザメ科と、あの、チョウザメ科というもので、サメじゃないんです
08		よ、ええ、
09	小倉	>サメじゃない↑の<
10	笠井	サメじゃないんですよ、
11	笠井	で、ベステルというものは、>実は()<養殖用に()人工的につくられた((ゆっくり、声張り上
12		げ)) () このキャビアを産むためのチョウザメでし [て= ((手振りを交えながら))
13	春日	[へ：：：]
14	小倉	=うん=
15	笠井	=>実は()<生態としては()えさを自分でとることがほとんどできないんだそうです、
16	高木	['は：：
17	春日	['あ()だから川でやせ細っちゃった[んですか？
18	小倉	['あ
19	笠井	[そう、食べることを知らないんですって ((手振り))
20	高木	['は：：： ↑そ：：： ((深く感心した様子))
21	春日	['へ↑え：：：]
22	笠井	['自分でとる捕獲っていう本能がね ((手振り)) ()人工で作られた魚なんでないそう[なんです、
23	春日	['は：：：]
24	高木	['へえ：：：]

ヨウザメが熊本の菊池川にいたかということだが、ペット用として飼っていたチョウザメをだれかが放流したのではないかと思われる。そこで、チョウザメを取り扱っているインターネットの通販業者に問い合わせたところ、6月20日に熊本県で購入した人が存在したものの、購入したのは稚魚だったので人違いということがわかった。結局、誰が放したのか今も真相はわからないというところで映像は終了する。

続くスタジオ場面では、笠井を中心にトークがはじまる。ここでは、やはりまだまだチョウザメは小さいので(オスにしてもメスにしても)どちらにしても卵を持っていないことが再度強調されたり、チョウザメ科といってもこのベステルという魚はチョウザメではなく養殖用につくられた特殊な魚で捕獲機能をもたないことや、身も食べられることなどが新しい知見として提示される。表-2のスク립トは、スタジオトーク場面がはじまり15秒ほどしてから約1分のものである。

ビデオ映像の後、スクリーンを背にした笠井が、キャビアへの期待を話題に出す。しかし、前田からまだ成魚ではないので、その可能性はないことが指摘される。続いて、01笠井の発言となる。

ここで笠井は、チョウザメの生態についての知見を披露する。01で「実は」
 といって導入をはかり、02で「専門家の知見」だからと信頼性の高い情報である
 ことを提示する。そして、指示棒で後方のスクリーン上の「チョウザメ科」
 という文字を指しながら、03で再度「実は」といい、こんなこと知らなかった
 でしょうというように、ベストルがチョウザメ科といってもサメでないことを
 明らかにする。このように笠井はチョウザメに関する新情報を提供するのだが、
 人々の興味を引く提示方法となっており、論点創出機能がはたらいている
 といえよう。

期待に反して05の高木は、冷静に「はい」といってうなずくものの、一方、
 06の春日からは、この知見をはじめて知り驚いている様子が覗える。「え(.)」
 と短く言うと同時に笠井のほうを向き目を見開きながら、「そうなんですか？」
 と高いトーンの強い驚きの声で笠井に質問（確認）する。春日が表現した驚き
 は、たぶん視聴者の多くが感じたことであり、春日のこの言動は、いわば、視
 聴者の代わりに驚き質問をするといった代理感情表出が行なわれているという
 ことができよう。06の春日の発言を受けて、春日の質問が終わらないうちに、
 待ってましたとばかり、07で笠井があらためてサメでないということを強調す
 る（論点解決機能）。続いて09で小倉が春日と同様、サメじゃないのかと早口
 で質問する。それに対し10で笠井が同様にサメでないということを再度発言す
 る。このように、春日から笠井、小倉から笠井と2度にわたり、それぞれ同様の
 質疑応答が繰り返えされていて、新しい知見が反響を呼んでいる様子が覗える。
 09の小倉の発言は、疑問形式で行なわれているが、驚きながらも事実の確認
 をすると同時に、サメでないとしたらなんなのかという興味を示し、笠井に
 対し何らかの説明を求めるはたらきをしていると考えられる。いわば、解説要
 請機能が作動しているといえる。

それに答えるかのように、11で笠井は、ベストルはキャビアを産むために人
 工的に作られたものだと言及する。ここでも新たな知見が披露され論点創出機
 能が作動している。ここからは、笠井の発言に力が入る。「実は」という言葉
 からはじまる笠井の情報提示（知見披露）は、「実は(.)」と早口で強く言っ
 た後、少し間を取り、その後のフレーズとはっきりした区切りをつけている。
 さらに、その後が続く発言は、それまでと調子が変わり、ゆっくりとしたペー
 スで声を張り上げ、さらに手振りを交えながら、力強い調子で行なわれてい

る。「養殖用に (.)」といった後に少しの間、「人工的につくられた (.)」といった後にも少しの間をとり、指示棒でスクリーン上のベステルの写真を指しながら「このキャビアを産むためのチョウザメでして」と続けていく。これらの間はそれぞれのフレーズに区切りをつけ、笠井が提示した情報を、効果的に強調する役目を果たしている。

11、12の笠井の解説に対し13の春日は「へ：：：」と驚きの反応を示す（代理感情表出機能）。それに対し14の小倉は「うん」と軽い調子で、それでどうなのと先を促すように、笠井の発言に対しさらなる解説を求める相槌をする（発言促進機能）。これらの反応は、06の春日、09の小倉の質問に対する11、12の笠井の応答、そして、それに対する13の春日、14の小倉の反応という一連の流れの中で行なわれている。

続いて、15の笠井は、再度、「実は」からはじまる発言をし、新たな知見を提示する。11の笠井の発言と同様に、「実は (.)」と早口で強く言った後、少し間をとり、その後のフレーズとはっきりした区切りをつけている。「生態としては (.)」と言いながら指示棒でベステルの写真を指し、声を張り上げながら、えさを自分でとることができないことを伝えている。ここでも新たな論点創出が行なわれていると同時に、間が次の言葉を際立たせるように作用している。15の笠井の発言（解説）に対し、16で高木がそういうことなのかというように「は：：」と驚いた調子で応答する。同時に、17の春日は疑問形で、18の小倉は「あ」という短い言葉で、なぜベステルがやせてしまったのかそれで理解ができるという反応を示す。17の春日の発言が終わらないうちに、両者の反応に勢いをつけた様子で、19、22の笠井は、15での発言と同じ内容を今度は言葉を変え、再度強調しながら繰り返す。19の笠井の発言は、17の春日の「だから川でやせ細っちゃったんですか？」という質問に応答するような形で行なわれ、「そう、食べることを知らないんですって」と手振りを伴いながらの発言となっている。これらの17の春日と19の笠井の「えさをとることができないので川でやせ細っていた」というやりとりを聞く中で、20の高木は、「は：：：」と言い、「↑そ：：：」とそうだったのかというように、再度、驚きを交えながらも深く感心した様子で同調を示す。高木の「↑そ：：：」が終わらないうちに、21で春日も19の笠井の回答に対し「へ↑え：：」と言い、それは知らなかったというような反応する。両者の呼音が少しずれて重なり、新しい知見に

驚く雰囲気が充満する。このような驚きや感動の表現を、まさに、視聴者もテレビを視聴しながら出演者と同様、表出していると推測される。つまり、ここでは、出演者による代理感情表出機能が活発に行なわれている。

続く22の笠井の「人工で作られた魚なので捕獲本能をもっていない」という発言は、提示した新情報（笠井の11、12、15）をまとめ、繰り返し強調する形となっている。この発言場面では、20の高木や21の春日の反応による驚きの表現に力を得て、これまでより手振りが大きくなり「捕獲」と言いながら、実際に笠井がベステルになったつもりで、上半身をも動かし両手で他の魚を捕まえるジェスチャーをする。声も大きく張り上げ、強い調子で説明（発言）する。それに対応する形で、23の春日の「は：：」という発言と、24の高木の「へえ：：：」という発言が同時に行なわれる。ここでも両者が、再度、驚きの対応をしている様子が覗え、代理感情表出機能がはたらいっている。

以上みてきたように、笠井は、チョウザメの生態についての知見を披露するのだが、まず、専門家の知見であることを提示して情報に対する信頼性を強調し、その後の笠井の発言に重みをつける。そして、「実は」という言葉を情報提示（知見を披露）する際に効果的に使用し、「知ってました」と上がり調子でトークをはじめ。このパターンは「～～だそうです」という言葉に続いていく。笠井の提示の仕方には、視聴者の情動を刺激し驚きを増幅させるしかけがはたらいっており、いわば、情動増幅機能がはたらいっているといえよう。このように、この事例では、新情報を次々提示していく話題提供型ともいえるトリビアトークが展開されている。

3-3 次々と疑問を提示し詮索を試みる「詮索トーク」

詮索トークとして取り上げたのは、事例3「乳児をコードで感電」で現れたものである。自衛隊イラク派遣基本計画に関するトップニュースに続いて、この項目は2番目に放送される。CMをはさみ約5分のビデオ映像提示後、約5分のスタジオ場面となる。

ビデオ映像で紹介されたニュースは、父親による乳児虐待疑惑についてである。それによると、電気工である父親が、生後4ヶ月の次女が自宅でぐったりしているのに気づき電気ショックによる刺激を与えたのだが、虐待の疑惑が浮上しているということだ。ビデオ映像では、虐待の可能性を匂わせる医師、病

表-3 詮索トークのスク립ト

01	佐々木	“う：：ん”
02	小 倉	これは：一緒に「住んでいた奥さんは：気づいていないの、
03	佐々木	「うん”（小倉を見ながら）」
04	平 野	ええ（。）奥さん <u>も</u> ：あの：病院の先生も聞いたところ、全くこの額の傷などにも気がつかなかった
05		し（額に手）（。）肋骨が折れてるのも、いつ折れたのか <u>わからない</u> と話しているようなんです [ね、
06	佐々木	[今ね、
07		<u>VTR</u> で>あの、お話をくださったくお医者さんの [話では骨折は2週間以上↓前 [(ゆっくり) (02)
08	平 野	[はい [前のもの ((早口))
09	佐々木	のものだっていうんで（胸に手をやりながら）、その12月3日の検診の段階で <u>気づかない</u> というの
10		も（。）ちょっと不思議 [ではありますよ↑ね、
11	平 野	[そうですね、ただあの、あざとかそういう <u>ものがなかった</u> [わけで：
12	佐々木	[ええ
13	平 野	この肋骨というのは、あの：レントゲンを撮ってはじめて [ま：わかるものですよ、=
14	小 倉	[う：ん（軽い調子で）
15	佐々木	あ：：
16	平 野	= [ですから
17	小 倉	[気がつかないで骨折していること [あるから [ね：
18	平 野	[ありますねえ：ただまあ8本という本数 [ですから
19	佐々木	[“う：：ん” [“う：：ん”
20	小 倉	“ただ、ないと思うんだけど↑な：”（つぶやくように） =
21	平 野	= え：もっとそれ以前（手を左右に振りながら）、もっと前の、もしかすると傷でわかりづらかった
22		[というのものもあるかも知れません、
23	小 倉	[え：それで：：この時（。） <u>なんで</u> （15）意識がなく、なくなって（。）た↑の：：、
24	平 野	そうなんですえ（。）ですから <u>それが電流を流した</u> ことによって、ま、失神してしまったのかどうか
25		かっていうあたりなんですけれども（。）あの：は、運ばれたときにはほとんどもう、自発呼吸も <u>ど</u>
26		<u>きない状態</u> 、そして、心臓ももう機械に通さないと波形が <u>わからない状態</u> だったということですから、
27		かなり脳にも空気が、その <u>いかない状態</u> が続いていた可能性が高いということですよ↑ね、。

院関係者のインタビューに対し、虐待ではなく蘇生措置だったと真っ向から対立する容疑者の母親のインタビューが紹介されつつも、疑惑を生起させるような内容になっている。さらに、元同僚の証言も放映される。続くスタジオ場面では、まず、解説役兼司会役の平野がプロジェクターで家族構成を示した図を示し、家族状況と事件当日のあらましをわかりやすく説明する。次に、この事件で使用されたものと同じものを再現した電気コードを図示しながら感電に陥らせた手法を具体的に解説する。さらに、乳児の身体に残っていた複数の傷痕（搬送先の病院で医師が発見）について図解し、続いて、出産から現在にいたる乳児の経歴を示し、これまでの経緯について説明を加える。ここまで約2分を費やす。その後、スタジオでのトークが3分ほど行われる。表-3のスク립トはスタジオトークの前半1分15秒分である。

このスク립トでは、続けて3つの疑問提示がなされ詮索トークが展開される。

スタジオ場面は、01の佐々木による「う：：ん」という考え深げなため息と

もうなり声ともつかない発声から開始される。ビデオ映像で提示された情報が、父親が子どもを虐待したのではないかという疑惑を提示しながらも確証が得られず、さらに、虐待の原因もわからないなど曖昧さを残した内容となって終了していることを受けての結果と考えられる。いったいどう理解したらよいのかわからないという意味合いが01の佐々木の発声に含まれている。

すぐに02で小倉が生起した疑問を解決すべく事件究明に向け詮索をはじめめる。この発言は、ビデオ映像では触れられていなかった奥さんの認識に関する質問となっている。疑問形式で行なわれる詮索は、新たな論点を提供し、いわば、論点創出機能がはたらいているといえよう。小倉の「一緒に」という言葉の後、その発言と重なるように03で佐々木が小さな声で「うん」と小倉のほうを見ながら発言する。これは、詮索をはじめた小倉に対し「そう、そうなのよ。それが聞きたかったのよ」と同調する発言となっており（同調提示機能）、佐々木も小倉と同様の疑問を抱いたことが推測される。さらに、小倉の発言を後押しする役目も果たしている。小倉の疑問は04、05の平野の回答により一応明らかにされる（論点解決機能）。しかし、奥さんは何か知っているのではないか、という可能性は打ち消され、それ以上の発展は見られず、問題の根本的な解明にはつながっていない。

平野の発言が終わるやいなや、待ち構えていたように佐々木が06、07、09、10で次の疑問点を提示し詮索をはじめめる。感電による虐待疑惑は昨日のことだが、担ぎ込まれた病院で発見された2週間以上前の傷痕（ろっ骨8本骨折）が、なぜ、4日前に受診した乳幼児検診の時に発見されなかったのかと、胸に手をやりながら指摘する。問題解決へ向け新たな論点が抽出される。ここでは再度、論点創出機能が作動している。それに対し、平野が08で相槌をうち、11で回答を始める。07の佐々木の発言を見ると、「2週間以上前（（ゆっくり））（0.1）」と2週間以上前という点を強い調子で、かつ、ペースを落としてはっきりと強調している。しかも、この言葉の後、間をとると同時に次の発言を少々早口で言うことにより前後において区切りがつけられ、この言葉を際立たせる結果となっている。さらに、07の佐々木の発言に対応する形で、08の平野が即座に強い口調で、しかも早口に「前のもの」と追隨してくる。この発言は、少し前の08の平野の「はい」という相槌とは異なり、発言者の言葉を繰り返し引き取るような形で強い調子の相槌となっている。この平野の相槌の仕方

により、2週間以上前という言葉は虐待疑惑に関する大きなポイントの一つであるというメッセージが伝わってくる。ここでは、論点を強調し、さらに、出演者の理解を助けるために解釈補助機能が行なわれる。この機能により、結果的に、平野が解釈する方向（虐待示唆）へ結論が誘われていくように見受けられる。

11で平野はまず「そうですね」といって10の佐々木の発言に同調を提示し、それから回答をはじめ。「ろっ骨はレントゲンを撮らないと骨折しているかどうかわからない」という13の平野の回答に、14で小倉は同調し、一步遅れて15の佐々木も「あ：：」といっ、て、そういうことだったのかと気がつく。14に続けて小倉は17での発言となる。平野の回答についてフォローするような形で行なわれている17の小倉の発言では、平野の発言を小倉自身の言葉で言い変えることにより自分自身への理解を深めると同時に、他者への理解を促すという解釈補助機能がはたらいているといえよう。

一方、16で平野は、13の平野の回答に続けて「ですから」と結論を言おうとするが、それと同時に、17で小倉が発言をしたため会話の順番を小倉に譲った形になり、16の平野の発言は尻切れトンボで終わる。17の小倉の発言に対し、18の平野は「ありますね：」と一旦小倉の発言を受諾し肯定する（同調提示機能）ものの、8本という数は気がつかないで骨折したとは考えづらいという点を指摘する。ここでは、再度、事実確認をしながら、あくまでも中立の立場での事実解説機能が行使されている。ポイントとして再提示することにより、結果的に、結論へと解釈を誘導するような方向性が見受けられる。17、18の小倉と平野の会話を聞いている佐々木は、「う：：ん」を2度繰り返す。はじめの反応では、気がつかないで骨折することがあるという2人の会話が行なわれたところで発生されており、この結論には納得できていない様子が覗える。次の反応は、平野の「8本という本数」という発言の直後になされており、これに対してどう理解したらよいかかわからないという意味合いが含まれていると考えられる。

18の平野の指摘を受けて、20で小倉は「°ただ、ないと思うんだけどな：°」とこの場合は気がつかないで骨折しているということは考えづらいというように虐待を暗示するような発言をする。最後は上がり調子での疑問形となっており、小声でつぶやくようにいう形態から、はっきり言い切ってしまうのをはば

かっていると推測される。しかし20の小倉の発言が終わるやいなや、小倉の発言を引き取り乗った形（よく言ってくれたその言葉を）で、「え：もっとそれ以前」という21の平野の発言となる。この発言は、手を左右に振りながら、強い調子で強調されポイントを再提示する。続いて平野は、06、07、09、10の佐々木の疑問に一応の回答を与える（論点解決機能）。このように、16で平野は「ですから」と言いつつ、17の小倉に順番を取られ一旦発言をやめ結論に到達できなかったものの、その後の小倉の発言との掛け合いの中で、自然な形で結論を導いている。つまり17の小倉の発言に対しては、平野は18で一旦受容しながらもポイントを示唆し、21では20の小倉の発言をうまく利用して、自分の結論へと誘導する方向へ話を進めている。しかし、ここでも、問題の根本的な解明にはつながっていない。

21、22の平野の回答の途中で23の小倉は、さらに事件の真相を追究しようと、根本的だが核心に迫る疑問を提示し次の詮索を行う。「なぜこのとき意識がなかったのか」という小倉の発言は、これまでの発言の調子とは異なり、「え：それで：：」と語尾を伸ばしたり、「この時（.）なんで（1.5）意識がなく、なくなって（.）た↑の：.：」というように、間を多くとった言い方となっている。じゃ一体どういうことなの、どう理解すればいいのといった困惑を表しながらも、いよいよ問題の核心を突いていく様子が覗える。これに対し、24で平野が返答をするものの、結局、事件究明はならず、真相は全くわからないという状況で詮索トークは一応終了する。このような一連の詮索が終わったところで、続いて、ゲストに意見トークを求める展開となっている。

このように、出演者は、事件究明に向け、司会者に対する質問という形で疑問を次々提示していく。出演者による質問は、いきなり問題の核心を突くものではなく、まず、状況を客観的に理解しようとしてなされる。それに対し司会者は、論点の解決を試みる。しかし、司会者による回答は本質的な事件解明には至らず、そこで視点を変えた新たな質問がなされ詮索が再開される。このような質問回答の繰り返しが行なわれ、次から次へと詮索が続いていく。

3-4 説明スタイルの「解説トーク」

解説トークとして取り上げたのは、事例4の「向井亜紀が双子のママに」に現れたものである。この項目は、番組開始後25分、2番目のニュースとして放

送される。出演者は草野仁、森富美、有田芳生、鳥井守幸、南美希子の5人である。への字型のカウンターの正面に草野、森がスクリーンを背に座り、草野の左手に有田、右手には、鳥井、南が順に並ぶ。まず、ナレーションのついたビデオ映像でニュース内容を3分程度紹介し、その後、2分半ほどのスタジオ場面となる。

ニュース内容を見ると、アメリカで代理出産に取り組んできた向井亜紀、高田延彦夫妻に念願の赤ちゃんが誕生した（双子の子ども）ということだ。前半の向井の喜びの記者会見とは裏腹に、後半では代理出産の問題点が指摘される。代理出産を扱ったことのある医師のインタビューにより、日本ではこのシステムは認められていないし、子どもを産んだ女性が実母となる可能性があることなどが指摘される。ビデオ映像でのニュース終了後、スタジオ場面となる。スタジオでは、まず、草野の指示により、森がA2サイズのパネルを取り出し、今回の代理出産に関するチャートを示しながら20秒ほど代理出産の経緯に説明を加える。それからスタジオトークがはじまる。

この事例は、司会者草野を中心に、南、鳥井、有田、そして最後に再度、鳥井が発言をしていくパターンで、大きく4つの部分に分けることができる。

01で草野が「南さん」と南に呼びかけながら、南に話を振る。呼びかけられた南は、草野の発言に対し、02、04で小さな声で相槌を打ち、05で発言をはじめめる。

南の発言は、05、06で不妊者が子どもを切望する気持ちがよくわかると理解を示しながらも、08で代理出産に関する反対意見を述べはじめ。09の代理出産の問題点について指摘をはじめめる部分では、その直前の早いペースで単調にしゃべる様子とは異なり、ゆっくりと強い調子で、まず、「代理出産（（ゆっくり））」と発言し導入をはかり、その後、メリハリをつけながら疑問点を次々提示していく。11の南は、まず、問題の1点目として、代理出産が巨大なビジネスになりつつあると強い調子で発言する。ここでは、論点創出機能が作動している。続けて、11、13で、問題の2点目として「妊娠出産（（ゆっくり））っていうのもそれ、大きなプロセスだ（（ゆっくり））」と指摘し新たな論点を提示する。これらの発言は、ゆっくりと強調した調子で行なわれており、妊娠出産とはプロセスが大切であるということが、南の発言の重要ポイントであることを指し示している。さらに、「ですから」と早口で言い、結論を下す。つまり、

表-4 解説トークのスクリプト

01	草野	え：この問題については南さん、あのう、 <u>見方が</u> （。）立場によって大きく <u>分かれる</u> 「という問題＝
02	南	「ええ」
03	草野	＝ <u>でもあるわけ</u> です[けれども]（。）‘あの’ <u>南さんご自身</u> は <u>どういう風</u> にお感じになります？
04	南	[“う：ん”]
05	草野	そうですね、あのう、子どもが <u>欲しい</u> という思いはね、できない方にとっては、これも、 <u>ほんとに</u>
06	南	[(.)もう <u>切望</u> ですごくわかるんです。で、 <u>海をわたって</u> でも欲しいという気持ちもわかるので＝
07	草野	[そうですね、“うん”]
08	南	＝>まっ向井さんたち本当におめでとうございますといたいたんですけども、 <u>私自身個人的な</u> ことを
09	草野	いえはくこの <u>代理出産</u> （(ゆっくり)）ということに関して大いに疑問がある[んですね、 <u>それその＝</u>
10	南	「うんうん」。
11	南	＝ <u>ものがまっ巨大なビジネス</u> に[なりつつあります]、でまっ <u>産卵</u> っていうのは、その <u>妊娠出産＝</u>
12	草野	「うん” はい。
13	南	（(ゆっくり)）ていうのもそれ、 <u>大きなプロセス</u> だ（(ゆっくり)）[と思うんですね、>ですから<＝
14	草野	[ええ]
15	南	＝それをこう <u>ネグ</u> って[しまった（(ゆっくり)）]ものは、まっましてやその <u>第三者</u> の、あのう <u>お腹＝</u>
16	草野	[う：ん]
17	南	＝を借りるっていうことにも、まっ疑問ありますよね、 <u>素直に賛成</u> はできないですね。
18	草野	鳥井さんの見方はいかが[ですか？]
19	鳥井	[まあその、ただそれはたとえば、 <u>法律的な問題</u> であるとかね、 <u>国内法</u> の場
20	草野	合いろいろ問題があるし、ただしかし、今、おっしゃったですが、これが <u>ビジネス</u> になる[危険性＝
21	鳥井	「うんうん、
22	草野	＝があるわけですよ、向井さんの場合そんなことは[ありえない訳でね、それをやっぱ容認でき＝
23	鳥井	そうですね [“うん” ええ。
24	草野	＝るのかということ、しかしやっぱ、 <u>お腹</u> をいためていなくても[自分の子どもってかわ[いいわ
25	鳥井	「うん” [“うん”
26	草野	けでね、そういうものにやっぱ抵抗し得ないし、あるいはいろんな <u>条件</u> をもちながらもやっぱそれ
27	南	を認めていかならないという <u>のが</u> 、[現状じゃないでしょうか[ねえ。
28	草野	「うん” [“う：ん、有田さん。
29	有田	あのう、どうしてもお父さんがほしいということで、向井さんたちはアメリカであの <u>2回代理母出産</u>
30	草野	に失敗されているわけですから、まっ、結果的にあのう <u>双子の男の子</u> が生まれたということは、 <u>三</u>
31	有田	<u>人</u> にとっては、もう <u>とても嬉しい</u> ことっていうのは言うまでもないことなんです、>やはり、今
32	草野	言われたように、あのう <u>ビジネス</u> になるという問題だけではなくて <u>やはり</u> 、代理母出産をきっかけに
33	有田	してあのう、 <u>さまざまトラブル</u> が、まあ <u>アメリカ</u> でも <u>起きている</u> わけですからね、まあ <u>そういう＝</u>
34	草野	[はい、ええ。
35	有田	＝ <u>うことがない</u> ことをあのう願いつつ、まっ日本でもあのう <u>法的整備</u> がなされていないので、 <u>こうい</u>
36	草野	<u>う機会</u> に大いに議論を進めなければいけないのかなあというふうに思いましたけど[ねえ。
37	草野	[>“そうですね”
38	有田	<あの、国内の日本の専門家の皆さんの方向性としては、このことには（（鳥井を見る））むしろ否定
39	草野	的、あの、これを（（鳥井が草野を見る）） <u>まあ</u> 、あの‘ <u>禁止する法律の成文化</u> （(ゆっくり)）とい
40	有田	う[ことに向けて努力が続いていると、ええ。
41	鳥井	[“そうですね、ええ”。
42	草野	まっ、そういう流れはあるんだろうけども、しかし、
43	有田	それらが <u>絶対的なもの</u> なのかということね、いろんな <u>緩和</u> す、できるような条件ってものを僕は <u>つくっ</u>
	有田	てもいいんじゃないかって感じはするのですがね。

15の発言では、妊娠出産のプロセスを踏んでいない向井に対し、「それをこうネグってしまった（(ゆっくり)）」という発言で大なる疑問を提示し、さらに、代理出産というものがプロセスを踏んでいないばかりか、第三者のお腹を借りての出産である点をあらためて指摘し論点を追加し（論点追加機能）、最後に、この問題については賛成できないと締めくくっている。ここでは、当事

者や、視聴者の代わりに問題の善悪を判定しようとする代理賞罰機能が冷静な南の意見という形で表出されている。

このような南の発言に対し、草野が07、10、12、14、16で相槌を打つ。草野の07における「そうですね」という発言は、06の南の「気持ちはわかる」という不妊者に対する理解発言に対し行なわれ、この件では草野も一定の理解を示している様子が覗かれる。このような草野の発言は、同調提示機能を果たしている。12の「はい」という相槌は、11の南のビジネス発言に対するもの、14の「ええ」は、13の南による「出産はプロセスが大切だ」という発言に対するものである。これらの相槌は、はっきりと発声され、南の1点目と2点目の指摘に対し草野が賛同し同調している様子が推測される。一方、10の「うんうん」という相槌は小さな声で発声されている。南の「大いなる疑問がある」という発言に対し行なわれ、それはどういうことなの、というように、南の疑問点に関する詳細発言を促す相槌となっている。いわば、発言促進機能がはたらいているといえよう。また、16の「う：ん」という相槌は15南の発言の「プロセスを踏んでいない」という発言に対して行なわれ、この点は検討の必要がある(考えどころである)というニュアンスが伝わってくる。

出演者のうち他の3人は草野が指名した南が発言しているのを聞きながら、うなずいたりメモを取ったりしている。しかし、2人の間に割って入り発言を行なうなどの行動は見られず、積極的に声に出して相槌を打つこともない。このスタジオトークでは、その後、草野の指名により発言者は南から他の出演者(鳥井、有田、鳥井の順で)へと交代するものの、指名を受けていない出演者によるこのような態度は変わらずに最後まで続いていく。

次に、草野は18で鳥井を指名する。鳥井は19で、「たとえば」と言って法律における問題に触れつつ、20で南が提示したビジネス発言を引用しその危険性を強い調子で指摘し(論点創出、再提示)、22でこういうことは向井さんの場合は起こりえないが、と補足する。さらに、24、26、27と続けて、「子どもってかわいいわけでね」だから、結局は「いろんな条件をもちながらも」認めざるを得ないのではないかと条件付容認という方向で発言する。ここでは、論点解決機能がはたらき、問題の解決に向けての提言がなされている。

これに対し、草野が21、23、25で相槌を打つ。21の「うんうん、そうですね」は、ビジネスになる危険性に言及する鳥井の20の発言に対し行なわれ、同

調を提示している。23の「°うん° ええ」は鳥井が向井さんのことに触れた発言22に対してのもので、25の「°うん°」は、自分の子のはかわいいという24の鳥井の発言に対するものである。これらの発言は、前述の南の発言中における草野の相槌場面の場合と相似している。鳥井の発言を肯定し、発言を促す役目を果たしている。積極的に肯定的意味を持つ相槌をはっきりとした口調で行ない、発言を後押しする様子が覗える（発言促進機能）。

条件付許容という鳥井の発言に対し、28で草野は、「う：ん」と言い、結論には言及せず、預けたままとなっている。論議を発展させるために、司会者として、自らジャッジを下さないという姿勢が見られる。続いて、有田を指名し発言を求める。

29から36の有田の発言は、まず、29から31で向井夫妻への気持ちの上での理解を示し、その後、代理母出産をめぐる問題点を提示し、今後の方向性を示している。31の後半では、鳥井の発言を受けて、はじめの問題点であるビジネスになるという点に「やはり」と早口で言及する。続いて、32では「やはり」と今度は強い口調で、代理母出産をきっかけに「さまざまなトラブルが、まあアメリカでも起きている」という現状を紹介しそのようなことにはならないことを望むという発言となる（論点創出機能）。31の前半の「いうまでもないが」に続くこの発言が、有田の強調点であることがわかる。ここで、34の草野が、「はい、ええ」と相槌を打ち有田の発言を肯定する。最後に、有田は35と36で、法的議論を進める必要性があることを提示して発言を終える。

37の草野は小さな声で早口に、まず、「そうですね」と35、36の有田の発言を受けとめ、有田の提示に対し、日本の法律が代理母出産を禁止するという成案化に向け動いているという報告をする。草野はこの点に関し解説をするつもりではなく淡々と事実を報告するのみで、ここでは、事実報告機能がはたらいっているといえよう。続く38の発言では「このことには」と言いながら鳥井のほうを見る。「むしろ否定的で、あの、これを」という39の草野の発言のあたりで、今度は鳥井が草野を見る。草野は視線で次の発言者を指名し、鳥井は、草野とアイコンタクトをすることにより、草野からの指名を受けている。そこで、41の鳥井による「°そうですね、ええ°」という同調提示をする相槌がうたれ、そのまま、鳥井の発言がはじまる。42では、法律を成案するにしても緩和できるような条件をつけるとよいという発言がなされ、草野の報告に対し解説を加え

た形でトークは終了する。つまり、ここでは、事実の報告に付け加える形で解説が行なわれる事実解説機能がはたらいっているといえよう。

以上見てきたように、トークは草野の指名により出演者が発言する形式で行なわれ、しかも、草野対発言者という2人の間のやり取りに終始している。他の発言者が同時に意見を述べたり口を挟むような状況は全く見られない。さらに、発言者が話している間、草野は相槌を打つものの多くを語らず、いわば、発言者の独り舞台となっているといえよう。そのような状況でのトークは、前置き、論点、結論（賛否、あるいは提言）という形でよどみなくなされている。たとえば、南の発言を見ると、前置きの後、論点を創出し、追加し、最後に冷静にジャッジを下すという形態が客観的な姿勢でとられ、視聴者に対し、この問題をどう解釈すべきかということを示している。他の出演者の場合も同様の形式がとられていて、出演者全員が冷静な態度で、淡々と解説調で話をする解説トークとなっているといえよう。

3-5 取り上げられる人の評価を含む「悪口トーク」

悪口トークとして取り上げたのは、事例5の「古賀議員釈明演説」に現れたものである。このニュースは当日のトップ項目である。スタジオの出演者は、渡辺宣嗣、赤江珠緒、三反園訓、井筒和幸、石坂啓の5人である。そもそもこの演説は、学歴詐称疑惑を受けた古賀議員が10日前に記者会見を開き疑惑を否定したことに起因している。席上で、古賀議員は、渡米し大学に赴き事実を確認してくると決意を述べた。さらに、卒業していなかったらどうするかという記者からの質問に対し、そんなことはありえない、もし、そうだったら議員辞職すると発言をしていた。その4日後、国会会期中でありながら渡米するが、渡米中の大学からの情報によると、卒業していなかったのはすでに明らかであった。しかし、現地で会見が開かれることはなく、帰国して2日後のこの日、はじめて本人の口から報告がなされたという状況である。

まず、古賀議員の演説時間（8時開始）に合わせて、約20分間、古賀議員による演説が福岡から生放送で中継される。演説終了後、4分間、所太郎レポーターより現場からの中継があり、演説場所の状況や人々の反応などが司会者の渡辺に向けて報告される。2分間のCMをはさんで、スタジオに場面が切り替わる。その後、合計7分30秒近いスタジオ場面となっている。